

WEB化による授業評価アンケートの変化

— データ活用の展望 —

石井 多恵子

城西大学 現代政策学部事務室

The Effectiveness of WEB-based Questionnaires: Prospects for Institutional Research

Abstract

Faculty of Contemporary Policy Studies of Josai University adopted an online system for course evaluation survey in 2018.

Due to the specifications of the online system, students are now required to state their name when answering the survey, in order for the facility to acquire accurate survey data. This has made it possible for the facility to analyze survey results in relation to network usage and grades based on access log and survey data.

The purpose of this survey is to show the results of the analyses and explore numerous issues that have surfaced and how the system can be utilized as part of a university's institutional research.

キーワード：授業評価アンケート、教務データ、大学 IR、活用

はじめに

本学部は創設 2006 年から授業評価アンケートを実施している。2018 年度から完全 WEB 化を図り、本学の E-Learning システムである WebClass のアンケート機能を利用した。WEB 化にあたって学生の回答率の変化を確認する調査を始めたところ、過去データの比較によって大学の教育改善や意思決定の合理形成に役立つデータが抽出できるのではないかと考えた。本稿ではその可能性を探るとともに、これまでの授業評価アンケートの実績を記録に残したい。

1. 授業評価アンケート実施の経歴

本学部の授業評価アンケート（以下、授業アンケート）は、学部創設 2006 年から実施されており 2018 年度の本年度で 12 年目を迎える。これまでの変遷を以下の表にまとめる。

表1 授業アンケート実施状況

	年度	実施時期	実施回数	実施方法	対象科目	対象者延数
導入期	2006年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	22科目	1656
	2007年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	43科目	3398
	2008年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	68科目	5174
	2009年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	54科目	6102
	2010年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	66科目	6229
成長期	2011年	12月	年1回	質問用紙+ マークシート	125科目	8822
	2012年	7月 12月	年2回	マークシート	128科目	8555
					106科目	7916
	2013年	7月 12月	年2回	マークシート	113科目	7079
					85科目	7082
	2014年	7月 12月	年2回	マークシート	92科目	6504
87科目					6395	
2015年	7月 12月	年2回	マークシート	138科目	8067	
				93科目	6143	
2016年	7月 12月	年2回	マークシート	124科目	7367	
				153科目	7238	
改革期	2017年	7月 12月	年2回	前期：マークシート 後期：マークシート 希望者のみ WEB	159科目	7462
					150科目	7365
	2018年	7月 12月	年2回	WEB	205科目	9772

2011年からアンケートの対象科目が2倍近くなり、以後も増加しているが、その理由はアンケート実施要領の変更にある。2009年に策定された「授業評価アンケート実施要領」には、履修者が50人以下の場合には授業アンケートを実施しないと定められていたが、2011年にはこれが撤廃され、対象科目が拡大した。

2012年からは年1回実施されていた授業アンケートが年2回となり、後期開講科目だけではなく前期開講科目においても授業アンケートが実施されるようになった。アンケートの設問も「学生の取り組み」「先生の授業の進め方」「授業全般」の三つに分類され、体系的な回答を得られるよう工夫がなされた。また、自由記述欄を複数設けて、学生からの自由意見を多く取得できるよう配慮が加えられている。

この時期から、取得したアンケート集計結果の開示がスタートし、学内学外に向けてアンケー

ト集計が公表された。このスタイルは現在も踏襲されており、本学部の授業アンケートの基礎となっている。

2017年後期に一部の科目において授業アンケートをWEBで行い、実施状況を確認する試みを実施された。この背景には、全学関連委員会において授業アンケートをWEBで行うという動きがあったことによる。本学部はこれに呼応した形でトライアルを始めた。WEB化にあたり検討した事項や紙媒体で実施していた授業アンケートの変更点を次に示す。

2. WEB化の検討

2.1 ネットワーク

授業アンケートをWEBで実施するにあたっては、学内のネットワーク環境の充実が必須条件であった。本学では、2014年に学内全域に無線ネットワークを配備し、持ち込みのPCやスマートフォンの接続を可能にしている。しかしながら、利用者が多い時間帯には接続に時間がかかることや接続後にネットワークが重いという指摘が教員や学生から上がっていた。学内の無線に接続ができない場合は、学生のもつスマートフォン等のキャリア回線に依存しなければならず、学生への負荷がかかる。2017年後期の授業アンケートでは、ネットワークに接続ができない場合は紙で行うこととしてWEB化のトライアルを実施した。このときのWEBシステムへのアクセス数を下表に示す。

表2 ネットワーク毎のアクセス数

ネットワーク種類	アクセス数	アクセス人数
学外ネットワーク	1408	638 ※(219)
学内ネットワーク	719	390
計	2127	854

学外ネットワークからのアクセス数は、学内ネットワークの約2倍であった。アクセスされた時間帯はすべて授業中であったことから、学外のネットワークを利用した学生は、学内から学外ネットワークを利用していたと想定される。また、学外ネットワークを利用してアクセスした実数は638人であり、うち括弧内の219人は学内ネットワークを利用してアクセスを行った人数である。これは、学外ネットワークを利用した34.3%は学内ネットワークの利用方法を知りつつも学外ネットワークを利用した、または利用せざるを得ない環境であったことが予想できる。

学内の無線ネットワークは、電波の干渉を自動的に防ぐための機能が搭載されているため電波干渉による接続の悪さは考えにくい。実際、電波干渉が発生した場合にはそのエリアで学内無線ネットワークへの接続が阻害されるが、特定のエリアで教員、学生全員が学内無線ネットワークに接続できないという報告はなかった。学内無線ネットワークに接続できないのではなく、

何らかの原因によって接続に時間がかかったため、接続を試みた学生が諦めて学外のネットワークを利用したのではないかと予測できる。

接続に時間を要する原因の一つには、無線ネットワーククライアントのローミング機能の影響が考えられる。無線クライアント、いわゆるノートパソコンやスマートフォンは、移動のために接続した無線アクセスポイントから離れて接続電波の範囲を超えたとしても、別のアクセスポイントの電波範囲に入れば自動的に接続するという挙動をする。これをローミングというが、この機能のために皆が通る教室入り口付近の無線アクセスポイントに接続が集中するという現象が起こる。無線ネットワークの性質上、接続した無線アクセスポイントの電波範囲であれば、接続数が多いという理由で無線アクセスポイントが自動的に無線クライアントを切断することはない。そのため、教室内に複数無線アクセスポイントが配置されていたとしても、人の出入りが行われる教室入り口近くの無線アクセスポイントへの接続が多くなり、結果として無線の接続障害につながる。これを打破するためには、教室に入った後に無線クライアントのネットワークデバイスの機能を一旦切ったのちに再度接続をすることが望ましい。2017年度後期のトライアルの結果を経て、2018年前期のアンケート実施の注意事項として、学生に学内無線ネットワークに接続が遅い際の対応法として、上記方法を周知した。

2.2 WEB アンケートシステム

授業アンケートは授業中に行うことを基本としており、WEB化の条件としてパソコンが常設されていない講義室でも授業アンケートを実施できる環境が整備されている必要があった。そのため、授業アンケートを行うWEBシステムはパソコン以外のスマートフォン等からもアクセスできる仕様が求められており、検討されたのが学内のE-LearningシステムあるWebClassである。WebClassは一般的なLMSの機能を備えており、科目ごとに取得できるアンケート機能を有している。また、モバイル端末でアクセスした際には自動的にモバイル用のインターフェースにリダイレクトされるため、アンケート回答時の負担が少なく利用ができた。

しかしながら、紙媒体で実施するアンケートと全く同じ条件をWEBに移行し設定することは機能面から不可能であった。紙媒体のアンケートは無記名で行われていたが、WebClassで無記名設定を施した場合、回答がすべて累積される仕様となる。つまり、一人が複数回答した場合でもそれらがすべて正式な回答レコードとして集計されるため、内容の正確性が著しく損なわれてしまう恐れがある。逆に回答数を制限して一人一回の回答とすると、回答中にイレギュラーな事態が発生して接続が途切れた場合、未完の回答が送信され、そのままアンケートへの回答権限を失う。実際に2017年後期のWEB化トライアルの際には、回答数を制限したことにより、回答中のネットワークトラブルや誤操作等で完了前にアンケートが終了し、紙媒体で再回答を行うケースもあった。

無記名のアンケートは、回答環境の不具合によって回答結果が歪む可能性が高いことが確認されたため、2018年前期授業アンケートの実施に際して、の回答方法について議論、検討がなさ

れた。

これまでアンケートを無記名で行ってきた理由は、回答者である学生が成績評価に影響することを危惧して、回答に偏重が来されることが懸念されたためである。しかし、先行研究は、牧野(2003)北海道大学評価室(2005)長瀬(2015)が学生の授業評価における記名と無記名の回答について有意な差はないことを指摘しており、金城・嘉手苅・高橋・渡久山・金城(2013)による記名式の授業アンケート実施事例の報告もある。吉川・有沢・川野辺・内田(2012)は、記名式アンケートの評価が高い傾向があるとする報告でも、その差は僅差であるとしている。

本学部では、これら先行研究を踏まえつつ、回答者の情報は担当教員にフィードバックしないことを前提として、記名式の授業アンケートを行うことが決定された。

3. データ分析

授業アンケートのWEB化と記名化によって、回答から紙のアンケートでは入手困難であった多様な情報を入手できることが分かった。また、WEB化によって回答率や回答結果にどのような変化が生じたかを把握するため、分析を進めた。以下に結果を示す。

3.1 回答率の比較

過去5年間の授業アンケートの実施・回答状況を比較した。2018年度前期は、アンケートのWEB化によって実施科目数と対象者延べ人数が増加していることがわかる。反面、回答率は例年に比べてやや低い。この原因を特定するために回答者と科目の分析を行った。

表3 2013年から2018年の授業アンケート回答状況

年度	期	科目数	対象者延べ人数	有効回答数	回答率
2013	前期	88	7068	4112	58.18%
2013	後期	85	7082	3252	45.92%
2014	前期	92	6504	3801	58.44%
2014	後期	87	6443	3309	51.36%
2015	前期	101	8034	5075	63.17%
2015	後期	81	6754	3998	59.19%
2016	前期	93	7336	4793	65.34%
2016	後期	104	7238	4281	59.15%
2017	前期	98	7462	5267	70.58%
2017	後期	96	7365	4660	63.27%
2018	前期	138	9772	5375	55.00%

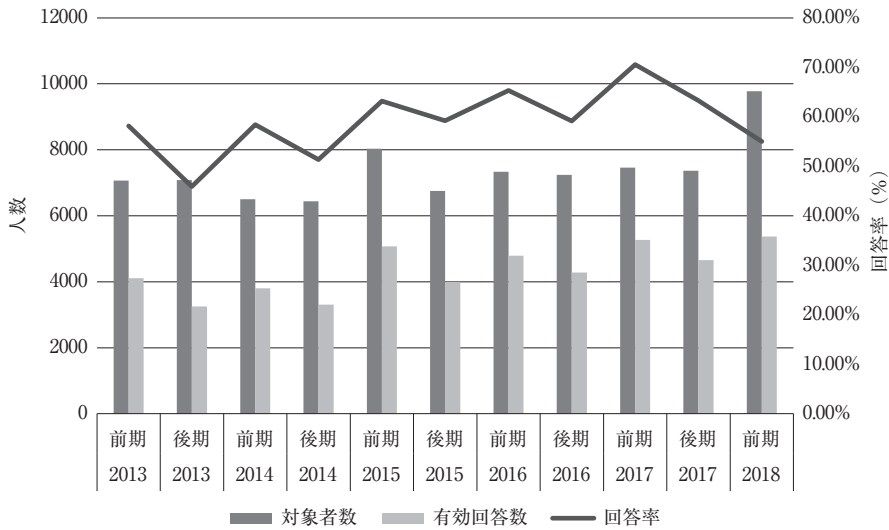


図1 2013年から2018年の授業アンケート回答率推移

2018年度の回答率が低下した理由を分析したところ、科目の担当者別に回答率が著しく変化することが分かった。

表4 担当教員別アンケート回答率

専任教員	60.20%
学部非常勤	61.42%
他学部非常勤	24.78%

アンケートのWEB化に伴って対象科目が増加した結果、これまで対象外であった他学部の非常勤教員が担当する科目も含まれることとなった。アンケート回答率をみると他学部非常勤教員の担当科目は著しく低く、全体の回答率を引き下げるようになっていた。専任教員および学部非常勤教員の担当科目においては、2018年度にアンケート対象科目が増えたにも関わらず、過去年度と同等の回答率を得ている。おそらく教員が適切にアンケートへの回答指示を出し、学生がそれに従った結果であることが想像できる。

この結果から、次回以降のアンケートでは、他学部の非常勤教員に対する協力依頼や説明をより丁寧に行うことが必要であることが確認された。

3.2 アンケートへ回答を行う時間帯とネットワーク利用

紙によるアンケートを実施していた時は、学生がアンケートに回答する要件として、アンケート取得のタイミングで授業に出席していることが必須であったが、WEB化によって設定された期間内であればいつでも回答できるようになった。この変化に学生がどのように対応しているのかを確認するため、アンケートを公開しているWEBシステムへのアクセス時間を分析した。学

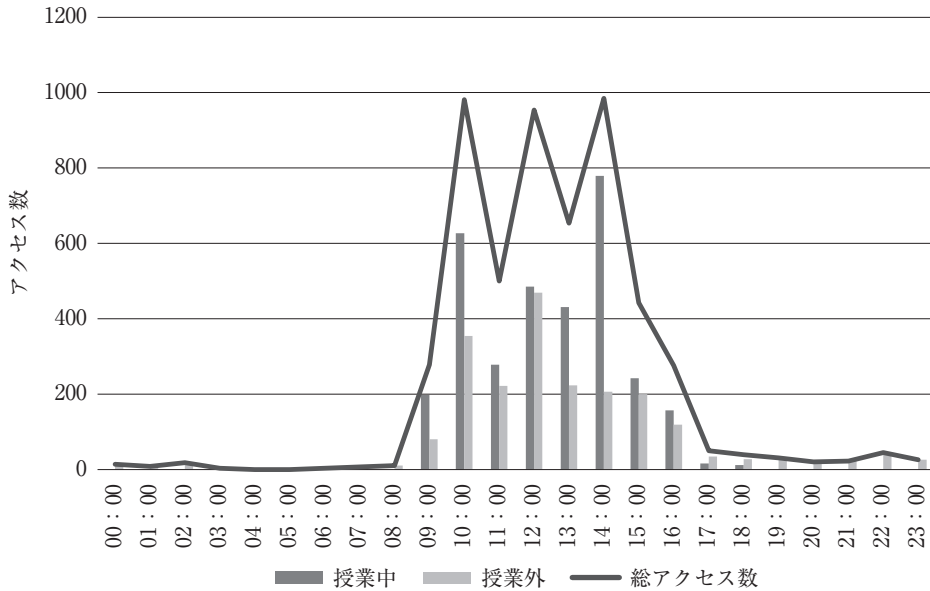


図2 WEB システムへの時間別アクセス数

生が回答した時間と授業が実施されていた時間を照合して、授業が開始されている時間にアンケートが回答されていた場合は、授業中に回答したものと仮定してカウントを行った。

図2から、アンケートへのアクセスは、授業が開始される1限(9:30~)から4限(~16:40)に集中していることがわかる。同時時間内のアクセスをさらに分析したところ、約4割は授業時間外のタイミングでアンケートに回答をしていることが分かった。休み時間や授業の合間を利用していると考えられる。全体のアクセス数の94%は、授業が集中する1限から4限に集中している。

この時間帯のアクセスについて、学生はどのネットワークを利用しているかの分析を試みた。図3は、アンケート回答時に利用されたネットワークのアクセス数である。

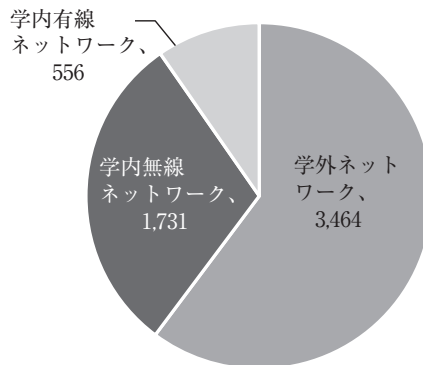


図3 1限から4限の間で授業アンケートに利用されたネットワーク

図3から、学外ネットワークの利用が半数以上を占めていることがわかる。だがこのデータからは回答者が実際にどこに身をおいてアクセスしているのかの判断は難しい。もし回答者が学外において授業アンケートにアクセスしているのであれば、VPN 接続を許可していない本学において学外ネットワークが利用されるのは当然である。

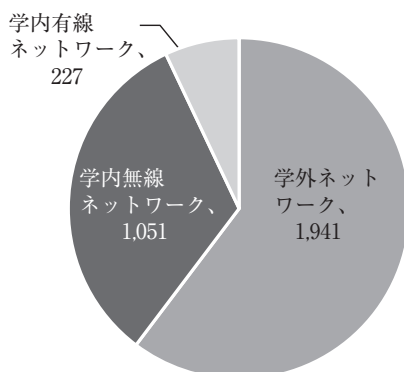


図4 1限から4限の授業時間内で授業アンケートに利用されたネットワーク

図4は、分析の条件を1限から4限のうち授業中にアクセスされたデータだけに絞り集計したものである。

授業中のアクセスに絞った結果においても、学外ネットワークの利用が半数以上を占めている。本学では全学に無線ネットワークが整備されており、教室にも必ず1台以上のアクセスポイントが設置されている。そのため、授業中に回答をした場合は学内の無線ネットワークの利用が多いと想定していたが、しかし図4は、学外ネットワークからのアクセスが著しいことを示している。アンケートのWEB化は、学内のネットワークインフラが整備されていることが条件の一つであり、これから先アンケートをWEBで実施するうえで重要な要素となる。今回の調査から学内ネットワークの利用が低いことが明らかになったが、その理由については別途調査が必要である。

3.3 評価と回答率、平均回答値の比較

本学部の授業アンケートは、「学生の取り組み」「先生の授業の進め方」「授業全般」の категорияに分かれており、それぞれに4問から7問の設問が設けられている。学生は、設問に対して「1 全くそう思わない」、「2 あまりそう思わない」、「3 どちらとも言えない」、「4 少しそう思う」、「5 そう思う」の選択肢の中からいずれか一つを選択し、記述が求められる設問は記述で回答する。

学生の回答状況と成績評価について分析を試みるにあたり、設問の回答で「5 そう思う」と回答される数が多いほど授業への満足が高いと仮定し、2017年度後期アンケートと2018年度前期アンケートデータで比較をした。なお、記述の回答は分析対象から除外とした。

表5 授業アンケート設問

分類	設問内容
あなた自身の取組について	私は、この授業を興味深く受けた。
	私は、自分の目標（ニーズ）を意識しながらこの授業を受けた。
	私は、予習や復習をするなど積極的に授業に取り組んだ。
	私は、授業を通してこの分野の理解を深めた。
	【自由記述】この授業に対するあなたのニーズや積極的に取り組めなかった理由など、「あなたの取り組み」についてどのような点でも構いませんので、できるだけ具体的に書いて下さい。
先生の授業の進め方について	先生の話し方は明瞭で聞きやすかった。
	先生は、学生の理解度を考慮して授業を進めてくれた。
	教材や資料がよく準備され、うまく活用されていた。
	板書やスクリーンに映し出された文字等は見やすかった。
	先生はシラバスに沿って授業を進めていた。
	この授業は、静粛に行われていた。
【自由記述】学生数に対する教室の大きさや授業で活用してほしい情報機器、騒がしい授業の場合の程度など、どのような点でも構いませんので、できるだけ具体的に書いて下さい。	
授業全般について	この授業を通じて印象に残った内容、エピソードがあった。
	【自由記述】印象に残った内容やエピソードをできるだけ具体的に書いて下さい。
	この授業は総合的にみて、満足できるものだった。
	【自由記述】授業に満足できた、またはできなかった理由や授業全般及び先生に対するあなたの意見や感想を必ず書いて下さい。

図5は、S評価とZ評価を取得した学生のアンケート回答率と平均回答値を比較したグラフである。本学の成績評価においてSは最高評価であり、Zは最低評価となる。調査の対象は、2018年度前期にアンケートを実施した138科目と2017年度後期の53科目である。2017年度後期は、アンケートのWEB化のトライアルとして科目数を限定してWEBアンケートを行っていたため、対象の科目数は少ない。

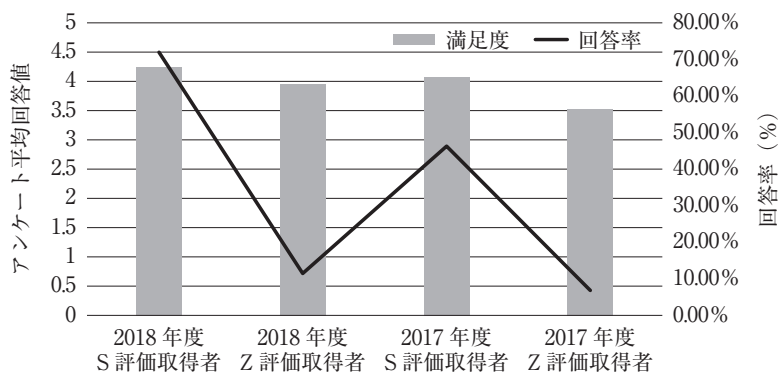


図5 成績評価別の回答率と平均回答値

図5から2018年、2017年ともに回答率の差が大きいことがわかる。対して、平均回答値については、S評価取得者とZ評価取得者に有意差はあれども、その差は小さい。S評価取得者とZ評価取得者の平均回答値についての詳細を知るため、アンケート設問の分類ごとに分析を行った。

表6 2018年度設問分類別平均回答値の比較

	あなた自身の取組みについて	先生の授業の進め方について	授業全般について
S評価取得者の平均回答値	4.17	4.32	4.33
Z評価取得者の平均回答値	3.77	4.04	4.18
ポイント差	0.40	0.28	0.15

表7 2017年度設問分類別平均回答値の比較

	あなた自身の取組みについて	先生の授業の進め方について	授業全般について
S評価取得者の平均回答値	3.89	4.24	3.89
Z評価取得者の平均回答値	3.27	3.73	3.46
ポイント差	0.62	0.51	0.43

表6、表7からZ評価取得者よりもS評価取得者の平均満足度がやや高いことがわかる。その中で「あなた自身の取り組み」に関する設問において、S評価取得者とZ評価取得者の満足度に有意差がある。S評価を取得する学生は、自身の取り組みに対する自己評価が高く、それに比較しZ評価取得者は自己評価が低いといえる。

3.4 回答者のGPAと満足度の分析

アンケート回答者のGPAと授業の満足度において、GPAの高い学生ほど満足度が高い回答をしていると仮定して相関分析を行った。本学ではGPAの最高値を4に設定し、成績評価のランクごとにGPポイントを割り当てて平均値を算出している。図6は、アンケート回答者のうち2年生から4年生のGPAと平均回答値を示した散布図である。今回の分析では、2018年度前期時点のGPAを利用したため、成績が確定してない1年生のデータは除外している。

散布図中央の縦線はGPAの平均値を示しており、横線は回答値の平均値を表している。グラフから伺えるように、相関関係は確認できない。 $(r=0.0037)$ 上記は全学年の散布図であるが、2年生から4年生の学年別に行った相関分析においても相関は確認できなかった。

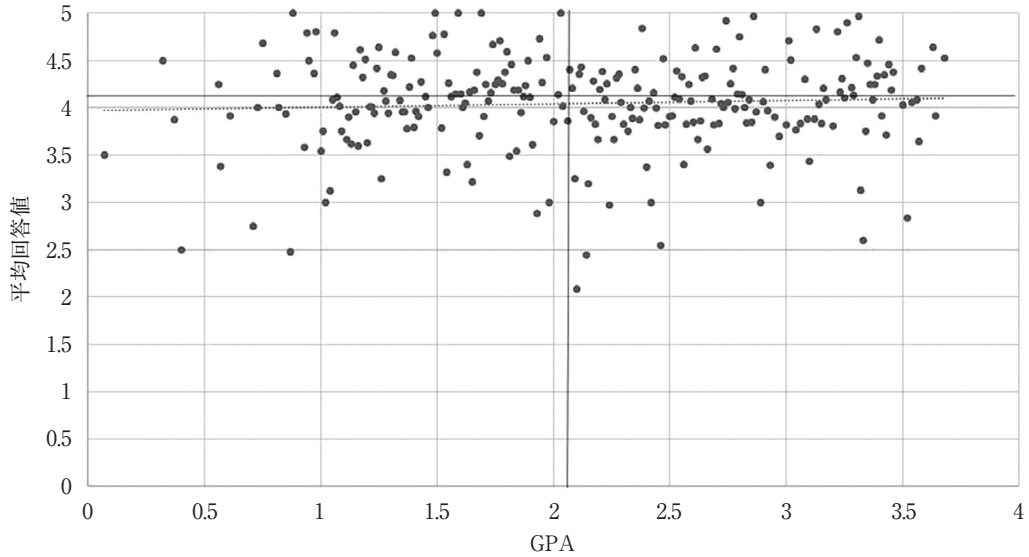


図6 GPAと平均回答値

GPAとアンケート回答をより細かく分析するため、設問分類毎の回答とGPAを分析した。

学生自身の取り組みに関する設問は、他の2つの設問分類と比較して相関係数が0.0732と最も高い。GPAが高い学生ほど、自身の取り組みを高く評価していることがうかがえる。この傾向は、「3.3 評価と回答率、平均回答値の比較」の表6、表7で示したように、成績評価が高い学生ほど自身の取り組みを高く評価するという結論と類似していることがわかる。

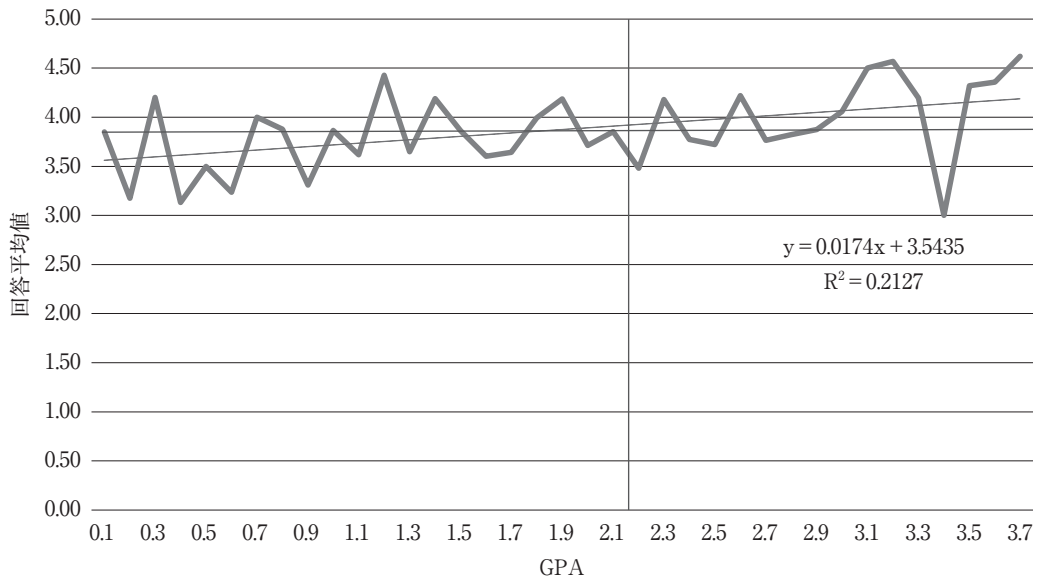


図7 「あなた自身の取り組みについて」の満足度とGPA

次に、授業の進め方と授業全般に関する回答について、GPAとの相関を分析した。

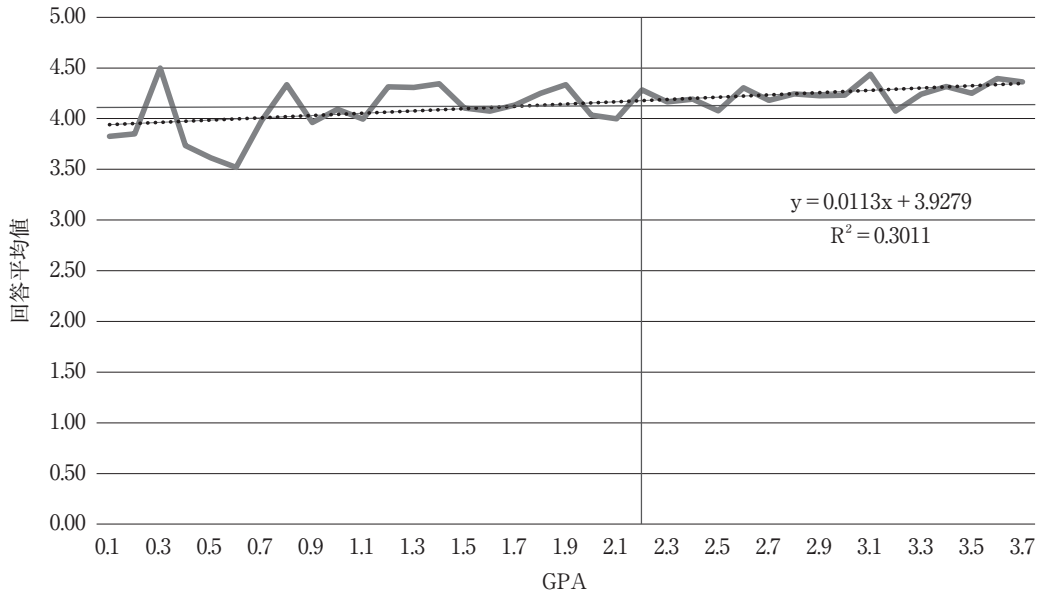


図8 「先生の授業の進め方について」の平均回答値と GPA

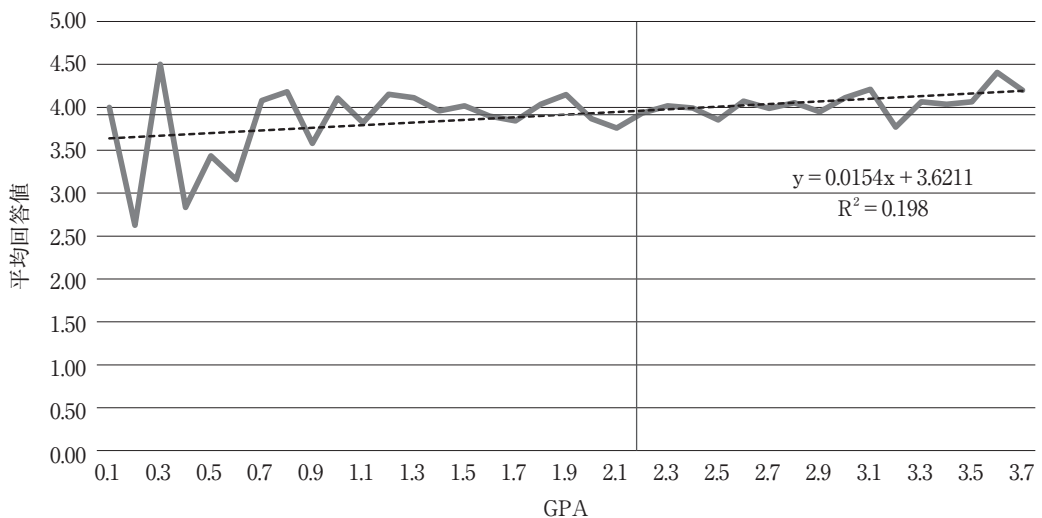


図9 「授業全般について」の平均回答値と GPA

「教員の授業の進め方」の相関係数は0.053、「授業全般について」の相関係数は0.051となり、両者は近い。この二つの分類については、わずかではあるが、GPAが高い学生ほど平均回答値が高いことがうかがえる。

3.6 平均回答値の年度別推移

ここでは、特定科目の回答平均値の推移を年度別に比較する。2018年度から開始されたアンケートのWEB化により、今後は満足度の推移を容易に把握することができるようになる。これ

に先立ち過去4年分のアンケート回答をデータ化して、満足度の推移をみることにする。

過去5年間同じ担当教員の同じ科目を選び出し、設問分類の「先生の授業の進め方について」と「授業全般について」の満足度を比較した。さらに、各授業の5年間の満足度の伸びを成長率と仮定して、1年あたりの平均成長率を導き出した。年平均成長率の計算式は以下の通りである。

$$\text{年平均成長率 (CAGR)} = \left(\frac{\text{2018年度平均満足度}}{\text{2013年度平均満足度}} \right)^{\frac{1}{(2018-2013)}} - 1$$

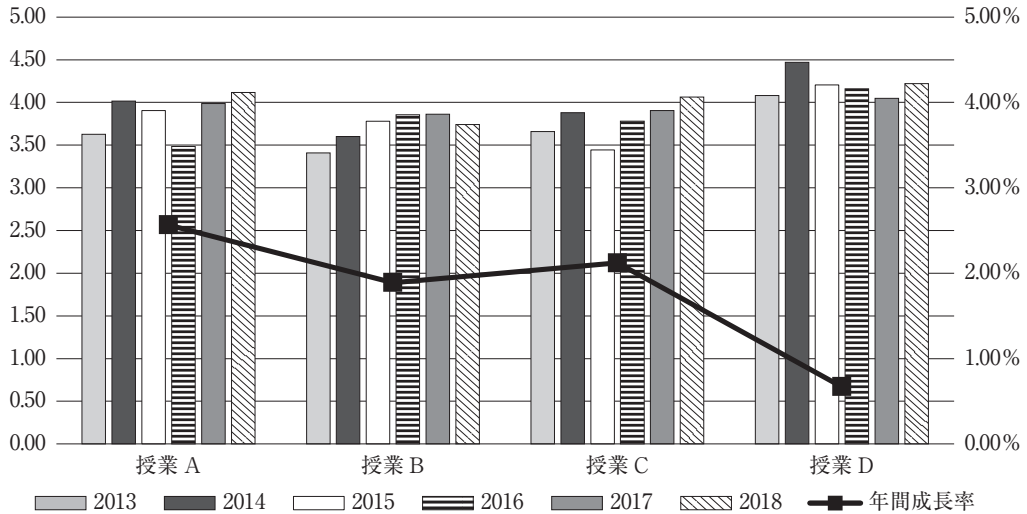


図 10 「先生の授業の進め方について」の満足度推移

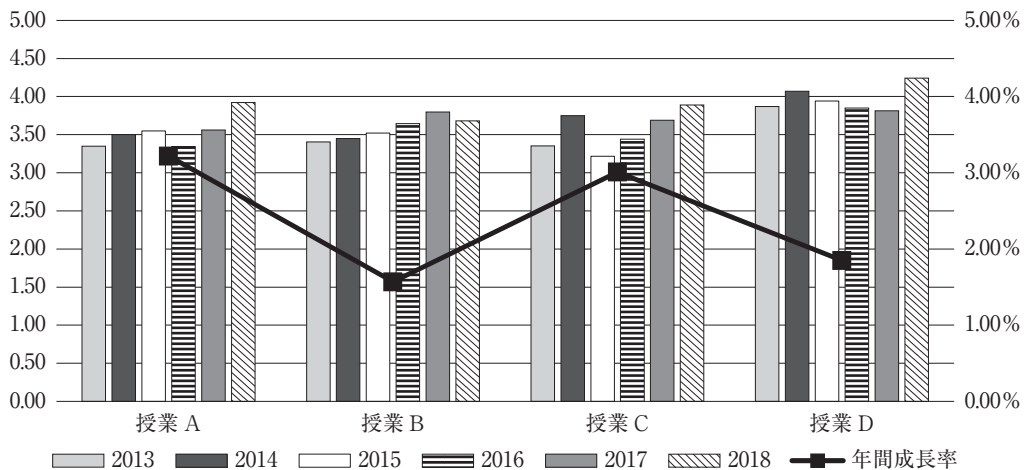


図 11 「授業全般について」の平均回答値推移

2014年度の「授業 A」のデータを除いて、「先生の授業の進め方について」の平均回答値と「授業全般について」の平均回答値は、比例している。回答値が高いほど良い評価であることか

ら、教員の授業の進め方が授業への評価や学生の満足度に結びついていると考えられる。また、全授業において平均的に回答値が向上していることも確認でき 2013 年度から 2018 年度を平均して、学生の満足度が伸びていると推測できる。授業 D においては、最も満足度の成長率が低い結果となっているが、他の授業と比べて毎年の回答値が高いためであろう。

おわりに

以下に、今回の調査で明らかになったことと今後の課題をまとめる。

- 1) アンケートの WEB 化および記名による回答率の変化は、専任教員と学部非常勤教員の担当科目では見られないが、他学部非常勤教員の担当科目では著しく回答率が低い。このことから、学生に対して行うアンケートへの回答指示に違いがあるのではないかと想定する。

アンケートの指示が適切であれば回答率に変化が生じないことを証明するためには、今後他学部非常勤教員に対してより丁寧なアンケート実施の説明と依頼を行うことが課題である。その上で回答率の変化を確認したい。

- 2) アンケートの WEB 化によって回答にはネットワークが必要となったが、学内の無線ネットワークを利用している学生は少ないことが分かった。半数以上の学生が自身のキャリア回線を利用しているが、この状況を生み出している理由について調査を進める必要がある。アンケート回答時に学内無線ネットワークにうまく接続ができずに、仕方なく学生自身のキャリア回線の利用を余儀なくされているのであれば、今後のアンケート実施に障害を来す可能性がある。今回のデータを関連部署と共有して、ネットワーク環境の正確な状況確認を行う必要がある。

- 3) 成績評価が高い学生ほどアンケートへの回答率は高く、低い学生は回答率が低い。しかしながら、授業の評価については成績評価が高い学生のほうが高い評価をつけつつも、その差は僅かである。はっきりとした有意差がみられたのは、自身の授業への取り組みについての評価であり、成績評価が高い学生ほど自己評価が高い。成績評価が低い学生は、授業内容に満足はしつつも、自身の取り組みに問題があるため学修に繋がらなかったことを示唆しているのではないかと推察するが、そもそも成績評価の低い学生の回答データは少ないため、根拠は薄い。成績評価だけでなく出席率や履修傾向などのデータを併せて分析することで、詳細に学習の傾向が見えてくる可能性がある。

- 4) GPA と授業への満足度については、相関係数は低く、一般的には相関が認められるとは言えない。しかしながら、ごくわずかではあるが GPA が高い学生ほど授業の進め方や授業

全般について高い満足度を示しており、また自身の授業に関する取り組みについては、GPA 値が高いほど自己評価が高いことが示された。一方で、図8の分布図からは相関以外のデータも読み取れる。少数ではあるが、GPA、満足度ともに低い分布に属する学生は、授業における理解度や満足度が低く、学習姿勢や履修について支援が必要な可能性を示していると推測できる。逆に、GPAが高いにも関わらず授業の満足度が低い分布の学生については、授業の内容を理解しながらも物足りなさや何らかの問題を感じていて、授業改善に繋がる意見を有している可能性がある。今回の調査では平均から極端に外れたデータを掘り下げることができなかったが、それは今後の課題としたい。

- 5) 授業科目の5年間の授業満足度の推移を分析した結果、今回調査対象とした科目すべてにおいて、満足度の向上が確認できた。今後、定期的に分析データをフィードバックすることによって、より満足度の高い授業が展開されることが期待される。

これまで示したとおり、アンケートの回答者が特定されることで教務データを結びつけることが可能になった。今後も継続して記名アンケートを実施し分析を試みることで、教育の質向上や学生支援、または退学者や留年者の傾向が見えてくるだろう。授業アンケートの分析は、授業改善だけでなく退学者や留年者の防止や授業に問題を抱える学生の支援に役立てられる可能性がある。データの分析と活用は、今後ますます重要になり大いに有用されるものである。最後に、授業アンケートをWEB化したことにより学生からの記述回答が飛躍的に増えたことを報告する。今後は記述回答も分析に取り込む方法を検討し、より精度の高い結果を導き出すことによって、学部や大学の発展と学生支援に寄与したい。

※本稿は、本学の人を対象とする研究倫理審査委員会の審査を受け、承認を得ています。

謝 辞

今回の研究ノート執筆にあたり、本学部紀要委員の市川先生と本学人を対象とする医学系研究倫理審査委員長の従二先生に多分な配慮と温かな激励をいただきました。深く感謝申し上げます。また、過去のアンケート実施経緯を詳細にご説明下さった本学部事務室の新田氏にも厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 長瀬荘一 (2015) 「学生の授業評価における記名式と無記名式の有意差 (1)」(神戸女子短期大学論攷 60 卷)、pp.81-89
- 牧野幸志 (2003) 「学生による授業評価の規定因の検討 (3) —— 記名式による調査が授業評価に与える影響 ——」(高松大学紀要第 40 号)、pp.63-75
- 北海道大学評価室 (2005) 「平成 16 年度授業アンケート特別版 (記名式) 分析結果報告」
- 金城忍・嘉手苅英子・高橋幸子・賀数いづみ・渡久山朝裕・金城芳秀 (2013) 「学生の授業評価を正確に反映する評価項目について —— 平成 22 年度開講の授業科目における学生による授業評価アンケート得点の傾向から ——」(沖縄県立看護大学紀要第 14 号)、pp.97-104

- 小久保吉裕・鈴木道隆・永田正義・佐藤邦弘・川月喜弘・内田仁（2006）「記名式と無記名式授業評価アンケートの比較」第12回大学数育研究フォーラム発表論文集、pp. 40-41
- 牧野雅・児島完二（2016）「授業評価アンケートの全面 Web 化による効果：大学 IR へ」大学 ICT 推進協議会 2016 年次次大会報告、<https://reg.axies.jp/pdf2016/WF23.pdf>
- 八房智顯・王栄光・里信純・石井義裕（2015）「広島工業大学における授業アンケートと GPA の相関分析」広島工業大学紀要教育編第 14 巻、pp. 69-74
- 木村敦・木村あやの（2015）「記名と匿名での授業評価アンケートの比較：——小グループ演習を含む講義科目における検討——」、日本教育工学会 Vol. 39、pp. 17-20
- 吉川政夫・有沢孝治・川野辺裕幸・内田晴久（2011）「構造化された授業評価アンケートの開発」、広島大学高等教育研究開発センター大学論集第 43 集、pp. 337-351
- 米谷淳（2007）「学生による授業評価についての実践的研究」、大学評価学位研究第 5 号、pp. 123-134